

Ohitoyoshi shokunin no
Burari Isakai Tabi

お人好し職人の ぶらり異世界旅



電
電
世
界
DENDENSEKAI

いしがわ りょういち

石川 良一

電気工事店を営んでいた青年。
分身をはじめ、様々なチート能力を
駆使して今日も人助け。

かみしろ はじめ

神白 一

良一の家を訪れた神の使い。

コ コ

Bランク冒険者の犬獣人の女性。
卓越した剣の腕前を持つ。

マアロ

食いしん坊なエルフの女の子。
回復魔法が得意な神官。

メ ア

妹思いで真面目な性格。
父が借金を残して
苦しい生活をしている。

モア

メアの妹。
病魔に侵されて床に伏していたが
本当は元気な女の子。

序章 異世界に行きませんか

石川良一、二十三歳独身、現在無職。

実家は小さな町の電気工事屋で、従業員は良一と父親の二人だけの零細企業であった。

幼い頃に母親を亡くした良一だったが、男手一つで育ててくれた父親に対して、深い尊敬の念を抱いていた。

そんな彼が、幼い頃から見続けてきた父親と同じ職に就くのも、当然の気持ちと言えよう。

地元の工業高校を卒業した良一は、父の紹介で二年間、隣県の大きな電気工事会社へ修業に行き、仕事のいろはを学んだ後、晴れて実家に戻った。

父親と一緒に言う仕事は大変だったが、ようやく父親に並び立つことができたようにも感じられ、良一にはそれが嬉しく、誇らしかった。

しかしそんな生活に、早くも暗雲が立ち込めることになる。

良一が修業から戻って二年目の冬のある日。

夕方、仕事を終えて帰宅した父親が、車を降りるなり胸を押さえて倒れてしまったのだ。すぐさ

ま病院へと搬送^{はんそう}されたが、医者の手当てもむなく、そのまま息を引き取った。

一人残された良一に悲しみに暮れる間などなく、葬儀^{そうぎ}の準備や受託^{じたく}済みの仕事の処理など、慌^{あわ}ただしく動き続ける日々をなんとかやり繰りする——そんな状態だった。

そうしてひと月が過ぎ、家業を継ぐことを決意した良一はがむしやに仕事に打ち込んだ。

しかし、父親が存命^{なま}していた時から不景氣^{ふけいき}の煽りを受けて仕事が減っていた時分、最初のうちは馴染^{なじ}みの工場の担当者や、父と仲の良かった同業者が仕事を回してくれたものの、それも長くは続かなかった。

なんとか一年間頑張つてみたものの、二十代の若造ではどうしようもなく、借金は増えるばかりとうとう、これ以上借金を重ねる前に店を畳^{たた}んだ方がいいと、会計士に告げられた。

その言葉に怒りを覚えた良一だったが、この一年で自分の力不足も痛感していたので、やむなく受け入れ、今は技術を身につけて将来に繋^{つな}げる時と判断したのだった。

家業を畳むと決めてからは、得意先や仕入先などへの挨拶^{あいさつ}回り。良一は行く先々で「頑張^{がんば}ったな」と温かい声をかけられた。二年間修業をしていた会社の社長からは「再就職先を決めていないなら、うちに来ないか」との誘いもあった。

「お言葉、ありがとうございます。ですが、一年間がむしやに頑張ってきた中で、自分がいかに世間知らずか気づかされました。数年かけて、資格の勉強や他業種を経験してみたいと思います」

良一はそう言つて、深々と頭を下げたのだった。

一通りの挨拶回りを終えてからは、税務署^{ぜいむしょ}で手続きしたり、実家兼倉庫を整理したりと、慌ただしくも寂しい^{さみ}日^ひが数日続いた。

そんな作業もやつとのことで一段落した、ある平日の朝。

元会社でもある自宅の部屋で、ジャージ姿の良一はベッドの上でダラけていた。

「特に用事もない一日は久しぶりだな」

良一は身長百八十五センチの恵まれた体格に細身ながらも仕事でついた筋肉を纏^{まと}った、しっかりと見た目であったが、性格はインドア趣味で、休みの日は部屋でネット小説を見たり無料ゲームアプリをしたりすることが多い。

その上、学校を卒業してからというもの、仕事だけに時間を費^つやしてきたので、少ない友人達ともすっかり疎遠^{そえん}になつていた。

「あゝ、飛んじやつたよ……」

誰もいない部屋に良一の舌打ちが響く。スマートフォンでネット小説を読んでいたところ、誤^{あや}つてバナー広告をタッチしてしまったのだ。

開いたのは、よくある漫画サイトや通販サイトではなく、何やら幾何^{きかく}学模様がちりばめられた不思議なデザインのサイトだった。

異世界に転移してみませんか、チート支給で君も異世界ライフ——そんな文字が躍^{おど}る、見るからに胡散臭^{うさんくさ}いページである。

「詐欺サイトも、こんなバレバレの手を使ってくるようになったのか」
 けれども、あまり見たことのない文句に興味をそそられ、暇を持て余していた良一は、思い切っ
 てこのサイトを見ていくことにした。

転移する先の世界の概要説明、使用通貨、エルフやドワーフなどのそこに存在するであろう種族
 の説明が続く。

それらのページを読み進めていくと、転移するための適性検査と書かれたページへと移った。

「設定が細かいな……全然質問が終わらない」

列挙されている質問一つ一つに答えを選択していくが、何せ数が多く、百を超えたのに半分しか
 終わっていない。しかし一度やり始めたなら最後までと、良一は気を奮い立たせた。

それからおよそ一時間――

「できた」

質問に全部答え、最後に“OK”と書かれたボタンにタッチすると……

ただ一言“ご協力ありがとうございました”と書かれたページに移動した。

「なんだそりゃ」

達成感が一気に霧散した良一は、表示されたページを閉じて再びネット小説を読みはじめたの
 だった。

「もう昼すぎか……。ラーメンでも作るかな」

いつも自炊をしている良一だが、今日は少々手を抜いてラーメンを作ることに決め、鍋に水を入
 れてコンロにかけた。

そこで、ピーンボンとチャイムが鳴り響いた。

「宅配便かな？」

一旦火を止め、玄関の扉を開ける。

「こんにちは、石川良一さんでしょうか？」

すると玄関の外には、高級そうな白いスーツに身を固めて、細い銀縁フレームの眼鏡をかけた
 五十代後半の痩せ型のナイスミドルが立っていた。

「はい、そうですけど」

「申し遅れました。神白」と申します」

「神白さんですか……。失礼ですが、セールスか何かですか？」

自己紹介とともに渡された白い無地に名前だけが書かれた名刺を受け取りながら、良一は訝しげ
 に問いかけた。

「いえ、セールスとは少し違います。先ほど、異世界転移ライフのサイトで回答を入力していただ
 きましたよね。つきましては、早速異世界転移の意思の確認をと思ひまして、こうしてお伺いした
 次第です」



目の前の人物の言葉に驚き、それ以上に呆れて、良一はしばしポカンと口を開いていた。

「……あの、本気でそんなことを言っているんですか」

「いやいや、お疑いになるのもごもっともです。では、論より証拠と言いますし、一度転移先の異世界をお見せしましょう」

神白は柔和な微笑みで良一をなだめると、胸の前で手を軽く叩く。

……すると。

周りの景色が一変した。

「こちらが転移していただく予定の異世界です。いかがでしょうか？」

見慣れた部屋は、大自然そのものとしか言いようのない森の中へと変わっていた。

良一が立っている場所は少し開けた広場といった感じだが、前方は先が見通せないほど鬱蒼と茂った木々に覆われている。

さっきまでの生活感溢れる雰囲気はどこへやら、澄んだ空気に木々の青々とした匂いが感じられる。

当然、道路や住宅といった現代日本を感じさせるものは、視界の中に何一つ存在しない。夢か幻か、自分の頬をつねって確かめようと試みた良一に、神白が穏やかに呼びかけた。

「これは夢ではありません。現実ですよ」

「確かに……本物みたいだ」

少し歩いてみたところ、靴を履いていない素足には柔らかな土の感触があり、そばにあるどししりとした木に触れると、ゴツゴツした樹皮の冷たさが指先から伝わってきた。

これは確かに現実だと、良一は改めて実感する。

「ちょうどあそこに、この世界の生物であるスライムがいますよ」

周囲を確認する良一に、神白が指差した。

そこには水色で透き通った歪な球体があった。バスケットボールより一回り大きいくらいのサイズだ。生物なのか、風もないのにプルプルと体を揺らしてゆっくり動いていた。

「この異世界には、人間に近い知性を持った異種族が多数存在します。そして、モンスターと呼ばれる、人に害をなすものも存在しています。このスライムもその一種ですね」

「なるほど……。プルプルしていますね」

良一が単純な感想を述べると、スライムはこちらに気づいて体を震わせながら近づいてきた。

「そして、異世界ではこのように……。魔法も使えます」

神白はそう言うと、手の平をスライムに向けた。

突き出した手先にうっすらと白い半透明な色の球体が現れ、小さな風切り音を立ててスライムへと飛んでいく。

球体が当たると、軽い破裂音とともにスライムは爆散した。

「へえ、今のが魔法ですか！」

「ええ。ごく簡単な、魔力を固めてぶつけるマジックボールという魔法です」

神白がさらりと使用してみせた魔法を見て、良一の口調に興奮が籠もった。

「石川さんも魔法を使ってみますか？」

神白の誘いに、良一は一も二もなく頷いた。

「そう緊張せずともいいですよ。簡単ですから」

神白に言われるがまま、良一は肩幅に足を広げて右腕を前に突き出す。

「はい、こうですか」

良一の肩に神白の手が触れると、体の中に今まで実感していなかった力の存在を感知した。

「今実感してもらっているのが魔力です。魔力を手の平に集めるようにしてください。手に力を込めるようなものです。それができたら、次は先ほど見せたみたいに、魔力を球体に見ましよう」

神白は簡単に言うが、魔力を扱うこと自体初めての良一には思うようにできない。それでも助言を受けて悪戦苦闘していると、イメージ通りの球体が完成した。

「まずはあの木に向かって放つてみてください」

良一は球体に離れて飛んでいくように念じる。すると、神白が見せた魔法よりは遅いものの、魔法の玉はまっすぐ飛んでいき、木の表面に傷をつけた。

「お見事です。無事にマジックボールが使えましたね」

「おお……！　ありがとうございます」

神白に褒められて、良一の顔に笑みが浮かぶ。思えば、人から褒められることなど久しぶりだった。

「では、そろそろ戻りましょうか」

再び神白が手を小さく叩くと、次の瞬間には良一の見慣れた自宅へと戻っていた。

「お疲れ様でした。いかがだったでしょうか」

「いやあ……凄いというか、信じられないというか……。さっきまでのことは現実ですよね？」

いまだ興奮が冷めきらない良一が、呆然と足元を見下ろすと、足と床板は土で汚れていた。

「もちろんです。――あ、気がつかず申し訳ございません。すぐに綺麗にしますね」

汚れに気づいた神白が、またまた手を叩く。すると良一の足を光が包み込み、汚れていた足や床はすっかり元通りになった。

「それでは、色々とお考えになる時間が必要でしょうから、本日はこれにて。また明日参りますので、よろしくお願いいたします」

そう言って、神白は帰っていった。



翌日、昨日と同じ時間に再び神白はやって来た。

「こんにちは、お邪魔してよろしいですか」

「どうぞ。汚い家ですけど」

昨日とは違って、良一は神白を客間へと通した。

「本日は異世界転移について話をさせていただきましたと思います」

良一がお茶を出してからちゃぶ台を挟んで向かいに座ると、神白は話を切り出した。

「まず先にお断りしておきますが、異世界に転移すると地球にはもう戻れないと考えてください。この前体験していただいたように、行ったり来たりすることはできません」

真剣な顔でそう言われて、良一は重々しく頷きながら考えた。

「この『異世界転移制度』は、昨今の事情を鑑みてできたものなのです」

「昨今の事情……ですか？」

「はい。昨今、神による不祥事や偶発的な事故などで多数の人々が人知れず異世界へと転移されています。とはいえ、異世界転移を全面的に禁止してしまうと、本当に必要な人々を救済することができなくなってしまうです。そこで主神は、異世界転移に関するガイドラインを策定したのです」

「はあ……なんだか神様も大変なんですね」

神白は小さく苦笑しながら続けた。

「ええ。それで、実際の施行を前に、異世界転移が及ぼす影響の実態調査にご協力いただく方を募集しております。石川良一さん、あなたはその第一号です。もちろん、誰でも転移できるわけはありません。あなたに適性があったからこそ、選ばれたのですよ」

「なんとなく分かりました。ちなみに、断るとどうなるんですか」

「昨日のことや私に関する記憶を消すだけです」

「アッサリ、記憶を消す」などと言つてのける神白に驚きながらも、良一は昨日の出来事を考えれば不可能ではないと実感して背筋を正した。

「今までは異世界転移する際に様々な神々が独自に転移者に力を与えていたので、その帳尻合わせが大変だったのです。そこで、異世界転移に関するすべてのことを主神の管轄に変更した……というの、内々の事情です」

神白は苦笑しながら懐から何やら書類を取り出して、良一に手渡した。

「こちらの目録をお読みください。サイトにも簡単に記載しておりますが、転移時に与えられるチート能力が書かれております」

良一は黙って書類に目を落とす。

——異世界転移に関して支給される目録——

一. 《神級鑑定》《全言語取得》《取得経験値・成長率十倍》《アイテムボックス》上記、四個

のアビリティを付与する。

二. 第一項以外に転移者が望むアビリティを三個まで付与する。

三. 転移者には永久に水が湧き出る水筒と、蓋をすれば中身が戻る弁当箱を支給する。

四. 転移者が望む神の贈り物を三点まで支給する。

五. 以上の支給する能力およびアイテムは、神への反逆などを行なった場合には剥奪する。

「随分色々貰えるんですね」

「まあ、今回はテストケースとして、多めに支給させていただきました」

なるほど、と納得した良一に、今度は辞書のように分厚い書物が手渡された。

「こちらが、支給できるアビリティの事典です。アビリティには五段階の階級があり、下から順に初級、中級、上級、特級、神級と上がっていきます」

「具体的に、どういうものなんですか？」

「そうですね……所持するだけで身体能力が上昇したり、体の構造が変化したりします。向こうの世界では修練を行うことや神から与えられるなどして手に入れます」

良一がパラパラと事典をめくっただけでも、剣術や弓術といった戦闘技術、商売に鍛冶など、種類は多岐にわたっていた。

神白の言葉を聞きながら、良一は食い入るようにアビリティの事典を見ていた。

「アビリティに関してはゆっくりご覧になってください。次はゴッドギフトについてご説明しましょう。これは石川さんが想像した道具を主神が作製するというものです」

「自分の想像したのですか」

「そうです。しかし、何事にも限度がありますので、要望通りの品を作製することはできないかもしれません」

「もし前向きに考えていただけるようでしたら、事典は置いていきますから、支給してほしいアビリティなどを決めておいてください。今度は三日後に参りますので、よろしくお願いいたします。

お茶、ご馳走様でした」

「お粗末様です。少し考えてみます」

良一はそう言いながら、どこか上の空で玄関まで神白を見送る。この時すでに、彼の心は異世界に行くことになんか傾いていた。

良一とて、日本での生活や、知人友人に未練がないわけではない。それでも、家族と仕事を失い、人生を再スタートしようというこのタイミングで転がり込んできた異世界転移の話を、大きな魅力を感じたのだ。



それから三日後。やってきた神白を家に上げると、良一は紙を差し出した。

「ほう……拝見させていただきます」

神白は一度頷いてから紙を手に取り、読みはじめた。

「支給するアビリティ三個は《神級再生体》《神級分身術》《神級適応術》ですか。戦闘系や生産系のアビリティがありませんが、大丈夫ですか？」

「戦闘系は想像ばかり膨らんで何が良いのか分からないので、転移先で模索します。生産系も習得方法はなんとなく分かるから、どうにかなるか。それで、特異系のアビリティにしました。これは習得方法が分かりませんしね」

「なるほど、よくご覧になつています。選ばれた三つのアビリティがあれば、大抵のことでは死なないでしょう。せっかく転移するのですから、それが一番大事です」

「向こうではモンスターに襲われたとしても、すぐに病院に行けないかもしれないと思って。今まで大きな怪我や病気は一度もしたことはないですけど、念には念を入れて……」

「回復魔法がありますが、万能ではありませんからね。その点《神級再生体》を使えば、体の部位欠損や病気も大抵のものは治すことが可能です」

神白は満足げに何度も頷いた。

「さて……ゴッドギフトはこちらですか。中に入ったものが増殖する箱、最新情報に常に更新される地図、こちらの世界から物を持つていくことができるコンテナ。……ふむ」

神白はリストを確認すると、目を閉じて何かを考えはじめる。

「……後の二つに関しては問題ないでしょう。ただ、中の物を増殖することが可能な箱は作成可能ですが、要調整です。そうですね……増殖させる物に相当する価値の代償を払う必要があることにしましょう。この条件がないと、他のゴッドギフトが増殖できてしまいますからね」

良一はそこまでのことを考えていたわけではないので、神白が提示した条件に納得して応じる。

「分かりました。では、その条件でお願いします」

その返答に頷いてから、神白は要望の紙をもう一度読んで良一に顔を向けた。

「念のため確認しますが、異世界に転移するという事でよろしいですね？」

「はい、異世界に転移したいです」

「そうですね、ありがとうございます。差し出がましいですけども、会社はよろしいのですか？」

「生前、父には好きに生きろと言われていたので。会社を畳んだこのタイミングは、何かの縁なのかと思います」

「なるほど。かしこまりました。では異世界転移について詳細を詰めていきましょう」

ちやぶ台を挟んで良一の向かいに腰を下ろした神白が、机の上に書類を置く。

「こちらから支給するアビリティと石川さんが望むアビリティ、それからゴッドギフトですが……転移する際に主神に会っていただくので、その時に主神より付与されます」

「でも、コンテナについては先に貰わないと、持っていくものの準備ができませんよね？」

良一が口を挟むと神白はあごに手をやって少し考える。

「それもそうですね。コンテナはお持ちですか？」

「隣の倉庫に一個中古のものがありません。それじゃダメですか？」

「見せてもらえますか」

「もちろん。倉庫はこの家の裏です」

早速、良一は立ち上がって、神白を裏の倉庫に案内した。

シャッターを上げると埃が舞い上がり、湿気た空気がむっと立ちこめてきた。倉庫の中は会社を畳んだ際の状態で、電線などの材料もほとんどなく、ガランとしている。

その隅に、十フィート（およそ三メートル）サイズのコンテナが鎮座していた。

「なるほど、あのコンテナですね」

「そうです」

神白はコンテナを見てから倉庫内を見回すと、ニコリと微笑んだ。

「コンテナと言わず、この倉庫全体で良いのではないのでしょうか。倉庫内にある物は全て、付与されるアイテムボックスに入るようにしておきます」

「いいんですか！　じゃあ、色々と準備しないと」

思わぬサービスを得られ、良一の顔が輝く。

倉庫一杯なら、かなり色々な物を異世界に持ち込めそうである。

「では、あともう少しだけ向こうの世界の知識をお伝えしておきましょう」

神白はそう言うと、手持ちの鞆かばんから取り出したパンフレットを開きながら説明を続けた。

「石川さんが転移する世界はスターリアと言います。先日体験していただきましたが、魔法が存在し、人間を襲うモンスターもいます。文明はこの世界の……そうですね、中世頃と考えてください。ただし、地域によっては十八世紀程度まで発展しております。現在、魔王の存在は確認されておりますが、周期的に考えると石川さんが転移して五年後に現れる可能性ががあります」

「ま、魔王!?」

突然出てきた単語に、良一が素っ頓狂とんきやうな声を上げる。

どうやら、ネット小説でもお馴染みの悪の親玉が転移先にも存在するらしい。

「もしかして俺、転移したら勇者になるんですか？」

「石川さんが勇者になるとは限りません。場合によっては、石川さん自身が魔王になる可能性もありますよ」

「俺が魔王ですか……」

勇者以上に実感が湧かず、良一は口を閉ざして唸り声を漏らす。

「スターリアでは、魔王は、魔力を操り世界に混沌こんとんと恐怖をもたらす者達の王と定義されています。魔人と呼ばれる種族はいますが、彼らの王ではありません。現に、二代前の魔王は人間でした」

神白は淡々とした口調のまま、重要な情報をポンポン出してくる。

「異世界転移を行うにあたって、我が主神側から石川さんの生き方を束縛そくはくすることはありません。石川さんが読んでいる小説のように、スターリアにない道具を発明して巨額の利益を生み出したり、成長の早いステータスを生かしてモンスターを倒して名を馳はせたり……あるいは田舎村いなかで静かに暮らすのもよし。どうぞ自由にお過ごしください」

物騒な単語に警戒したが、逆に考えればいきなり魔王と戦わされるような目には遭あわないということである。

良一は気を取り直して頷いた。

「分かりました」

「納得していただけたなら、契約けいやくということで、こちらにサインをいただけますか」
そう言って差し出されたのは、異世界転移同意書と題された書面。細かな条項にさっと目を走らせると、すでに説明を受けた通りの内容が書いてあった。

良一は記名欄きんらんに躊躇ちゅうちよなくサインをして神白に手渡す。

「……結構です。準備にはどれくらい時間が必要ですか？」

神白は書類を丁寧に折りたたんで懐に収めた。

「一週間もあれば」

「ではまた一週間後に来ますので、それまでに準備をお願いします」

「あ……！ すみません」

ふと、頭に疑問が浮かび、良一は慌てて神白を呼び止める。

「あの、異世界に転移したら地球での俺はどうなるんですか？」

「お亡くなりになったという扱いで、公的記録や関係者の方の記憶が改ざんされます。そこは神の御業によるものですから、一切不自然な点は残りませんので、ご安心を」

異世界に転移したら戻れないというのはそういうことかと、良一は理解した。

どうも自分が死んだ扱いになるというのは奇妙な感じだったが、幸か不幸かそれで悲しむような相手も思い当たらない。何より神白達が記憶を書き換えるのであれば、残された者の心に傷が残るようなことにはなるまい——そう考えて、良一は胸を撫で下ろした。

「また、実家の建物などは消滅し、この土地も更地になります。異世界に持ち込まなかったものに關しては、借金と相殺した上で、売却額に相当する金額を転移先の通貨でアイテムボックスに入金しておきます」

「そうですか、分かりました」

「ではまた来週」

そう言つて、神白はいつものようにどこかへ去つていった。

約束した一週間、良一は銀行の口座から有り金を全部おろして、異世界に持ち込む物を次々と購入していった。

大量の食料や調理器具、日用雑貨から衣類に風邪薬などの市販薬、テントやキャンプ用品、普段だったら読まないであろう参考書や図鑑の類、そして廃業を決意した時から補充していなかった電気工事のための配材等々。がらんどろだった倉庫は日が経つにつれて物で溢れかえつていった。

サバイバル生活に関する書籍や道具だけでなく、異世界系ネット小説に載っている物品など、思いつく物はあらかた手に入れた。

今後の地球での生活を考えずに金を使った結果、異世界転移のための準備は六日目の昼に全て終わってしまった。どうしようかと考えた良一は、地元 of 馴染みの場所を巡ることにした。

「この光景も見納めだな」

地元の神社や小学校に中学校、子供時代に遊んだ川岸などを回り、地元にながら小学生の時に一度登ったきりだった丘の上の展望台に立ち寄った。

展望台から生まれ育った町を見下ろすと若干センチメンタルな気持ちになったが、心に一つ区切りがついたと思えるようになった。

最後に、父親と一緒に仕事帰りによく立ち寄った中華料理屋で夕食を済ませた。



約束した一週間後の昼前に、神白が良一の家を訪れた。

「こんにちは石川さん。昨日はよく眠れましたか」

「はい。準備は万端です」

「そうですか。事前にお伝えしたように、転移をするにあたって、これから主神にお会いいただきます。その前に、一度倉庫を拝見してもよろしいですか？」

「分かりました」

良一は、神白を倉庫に案内する。

シャッターを開けると、一週間前とは打って変わって、良一が買い込んだ道具や書籍、食料などで足の踏み場もなくなっていた。

「倉庫一杯に物がありますね。生鮮食品もあるようですし、倉庫ごとアイテムボックスに保管しておきますね」

神白は良一に倉庫の外に出るよう促すと、パンと手を叩く。

すると、倉庫全体が一瞬で消失した。残されたのは建物の基礎も何もない、ただの空き地だけ。呆然と立ち尽くす良一の頬を、吹き抜ける風が撫でていく。

「消えた!? す、凄いですね……」

「石川さんもスターリアに行つて修業をすれば、簡単にできるようになるでしょう。全ては石川さんの努力次第です」

「本当ですか？」

一体どんな努力が必要なんだと苦笑する良一に、神白は真剣な眼差しを向ける。

「もう地球には戻つてこれませんが、よろしいですか」

「はい。覚悟はできています。お願いします」

良一も神妙な顔で答えた。

「では主神の御前へ」

そう言つて、神白が深くお辞儀をすると、良一の視界は霧がかかるように白く染まっていった。

「主神、転移者の石川良一を連れてまいりました」

「うむ」

白一色の世界に、神白の声と、凜とした男とも女ともつかない声音が響く。

どうやら神白が話しかけている相手が主神らしい。

白いだけだった視界が徐々に輪郭を持ちはじめ、良一は最初に神白の姿を認識し、そのすぐ近くに立つ主神であろうお方を見た。

しかし、顔があるはずの部分には……何もなかった。

「おうう」

思わず変な声を出す良一。

「私は顔がないからね、驚かせてしまったかな」

主神が絶妙なタイミングで声をかけた。

「改めて、転移を決めてくれたことに感謝する。これからの行く末に幸多からんことを」

そう言われただけで、良一の心はそれまで感じたことがないほどの幸福感と充足感に満たされた。「君は勇者として転移するわけではない、事故に遭って命を落として転生するわけでもない。君自身で選んだ異世界転移だが、人生の一つの目標となるように課題を与えよう。言うなれば神の試験だ。君には、転移する先のスターリアで私を崇めて^{あが}いる神殿を全て回ってみてほしい」

「全ての神殿ですか」

「神殿はスターリアの様々な場所に存在するから、異世界を見て回るといい。無論、試験に挑まずに別の目標に向かって生きていきたくとも構わない」

「一つの目標として生きていきたくと思います」

「うむ、では私から祝福を」

主神が差し出した右手から光の玉が放たれ、良一の体に入る。

良一は体に心地よい変化を感じ、望んでいたアビリティが身についたのを理解した。

「石川さんが望んだゴッドギフトは、利便性も考えてアイテムボックスに収めたままでも使用できるようにおまけしておきましたので、スターリアに着いたら確かめてみてください。一応簡易的な説明書きもアイテムボックスに入れておきます」

神白が横から補足した。

「何から何まで、ありがとうございます」

深々と頭を下げる良一に、神白が転移前の最後の忠告を口にする。

「石川さんから見て、異世界スターリアはこの日本よりも死という概念が近い場所です。しかし、恐れずに進んでください。あなたは自由なのです」

神白がそう締めくくると、良一の足下から眩い光が放たれ、彼の体を呑み込んだ。

やがて光が収まると、そこに良一の姿はなかった。

「主神、彼はスターリアで生きていけるでしょうか？」

「それは彼次第だな。少なくとも、私に見える未来では、大丈夫だよ」

神白はその言葉を聞くと、一礼して主神の部屋を後にした。

一章 最初の村

目を開けると、そこは異世界だった。

「ここって、神白さんに連れてきてもらった場所か」

森の中の少し開けた場所。目の前の木には良一がマジックボールでつけた傷があった。

「いきなり動き回る前に、もう一度マジックボールを撃ってみるかな」

異世界転移の実感を得るために、良一は前回撃ち込んだ木に向かってマジックボールを使ってみた。

前回と同じように体内の魔力を感じ取ってイメージすると、手の平から淡く光る球体が射出され、木の表面に深く傷がついた。

「よし、魔法は使えるな」

それから、良一は自分の状況を確認するために、自身に鑑定をかけた。

石川良一

レベル：1

生命力：150 / 150 魔保力：295 / 300

攻撃力：100 守備力：100

速走力：100 魔操力：100

魔法属性：全属性

所持アビリティ：《神級再生体》《神級分身術》《神級適応術》《アイテムボックス》

《神級鑑定》《取得経験値・成長率十倍》《全言語取得》

神の加護：なし

「これがステータスか。まあ、なんとなく意味は分かるな。マジックボール一回で魔保力ってやつを5消費するのか。結構な回数使えるな」

良一は事前にネット小説を読み込んでいたので、各項目の意味はそこそこ理解できた。ただし、一般人の平均とどれだけ差があるのかは、まだ分からなかったが。

能力の確認を終えた良一は、次に主神から貰った「ゴッドギフト」の地図を広げた。

「ここから一番近い町はどこかな」

地図は一目で情報が分かる仕様になっており、現在位置、周囲の地域の名前、方角、目的地までの距離などが感覚的に理解できた。

「今はこのイーアスの森の中だから、一番近いのは十六キロ先のイーアス村だな」

場所と方角が分かったらとにかく動こうと、良一はイーアス村へと歩きはじめた。

しかし舗装^{ほそう}されていない森の中、木々をかき分けて歩くのは大変で、肉体労働をしていた良一でも思うようにスピードが出なかった。

ゆっくり村に向かっていると、目の前の草むらから薄汚れた水色の物体が飛び出してきた。

「うわー！」

良一は驚いて身を引くが、よくよく見ると、神白が魔法で吹き飛ばしたのとよく似たスライムだった。

異世界転移で初めてのモンスターである。

スライムはブルブルと震えるだけで、敵対的な行動を起こしてこない。このままやり過ごすことも考えたが、神白が「人を襲う」と言っていたのを思い出し、改めて正対した。

「落ち着け、俺はできる」

初の戦闘で良一の心はめまぐるしく移り変わった。緊張に不安、興奮……あらゆる感情が溢れ、喉^{のど}が渇くを感じた。しかし、不思議とスライムを殺すという行為に嫌悪感^{けんあくかん}は抱かなかった。

「よし、よし、よし」

良一は頬を叩いて自分に活を入れ、手の平をスライムに向けた。

先ほど確認した手順通り、魔力を集める。

「マジックボール」

良一の手から放たれた魔法の玉は一直線にスライムに向かい、見事に命中した。

しかし一撃で倒すには至らず、今度は怒りを露^あわにしたスライムが先ほどまでとは打って変わって大きく体を震わせはじめる。

「神級鑑定」

良一はスライムの動きに警戒しつつ、慌ててステータスを確認する。

スライム

レベル…3

生命力…9／65 魔保力…7／7

攻撃力…55 守備力…50

速走力…15 魔操力…10

魔法属性…なし

所持アビリティ…なし

「ダメージが足りなかったのか。それにしても……スライムの二倍ほどじゃないじゃないか、俺の攻撃力は」

思わず脱力しそうになる良一めがけてスライムが突進してくる。これは紙一重でかわしたものの、体勢が崩れたところを再び体当たりされ、腹に食らってしまった。

「うおっへー！」

肺の空気が全て吐き出され、しばし呼吸困難になる。

その間も三度目の突撃を試みるスライムを油断なく横目で窺いながら、荒い呼吸を繰り返す。

「そう何度も食らうかよ」

スライムの動きは単調で、一直線に突っ込んでくるだけらしく、タイミングを計れば簡単に避けられる。そう読んだ良一は、肩で息をしながらも再びスライムに向けてマジックボールを放った。スライムの体力は残り少ないので、威力よりも射出速度を優先すると、魔法が若干早く発動した。

最初にスライムにぶつけたマジックボールよりも一回り小さかったが、スライムに当たると残りの生命力を削りきった。

「ふう、終わったか……って、おっおっおっ!?」

スライムを倒したら、急に体に力が漲ってきたのを感じ、良一は再び自分に鑑定をかける。

石川 良一

レベル…3

生命力…330／350 魔保力…485／500

攻撃力…200 守備力…200

速走力…200 魔操力…200

魔法属性…全属性

所持アビリティ…《神級再生体》《神級分身術》《神級適応術》《アイテムボックス》

《神級鑑定》《取得経験値・成長率十倍》《全言語取得》

神の加護…なし

「生命力と魔保力がプラス200、他がプラス100か。結構増えたな」

ここまで体の変化を実感するのは、支給されたチート《取得経験値・成長率十倍》のおかげであるが、気分が良かった。

「このスライムはどうするかな。何かの素材とかに使えるかもしれないけど、持っていくのもなあ……とりあえず、少しだけ取っておくか」

良一はアウトドア用のサバイバルナイフでスライムの体を少しだけ切り取り、百円均一ショップで購入した瓶に入れて回収した。

「思いがけず時間を食ってしまった。この調子だと村に着くのが夜になってしまうな」

とりあえず村に行ってから色々と考えしようと考えて、良一はイース村へと急いだ。

道中は、スライムの他にも芋虫の化け物、ビッグワーム、大きな蜘蛛のビッグスパイダーなどが

出現したが、どれもそれほど強いモンスターではなかったため、落ち着いてマジックボールをぶつければ怪我することなく倒せた。

良一は順調にレベルを上げながら、着実にイーアス村に近づきつつあった。

しかし、そうして地図で方向を確認しながら歩いてしばらく経った頃、近くで獣の唸る声が聞こえ、良一は足を止める。

辺りを窺うと、前方の茂みがいくつかガサガサと揺れ動いていた。

「なんだ？ 野良犬か？」

次の瞬間、三体の大きな犬が飛び出してきた。

レッサーウルフ

レベル…7

生命力…250／250 魔保力…140／140

攻撃力…230 守備力…130

速走力…320 魔操力…100

魔法属性…風

所持アビリティ…《初級咆哮》《遠吠え》

良一の体に緊張が走る。

「初めての複数相手……しかも、アビリティを持ったモンスターとの戦闘か」

良一は油断なく周囲を見回し、速度重視で次々にマジックボールを放つ。しかし、レッサーウルフは機敏に動いてこれを避けていく。

特にリーダー格と思しき一体は一際動きが良いため、良一の魔法が掠りもしなかった。

「くそ……一発ずつ撃つても埒が明かない。上手いこと範囲攻撃できないものかな」

攻撃を続けながら試行錯誤していると、有効範囲の広がったマジックボールを放つことができるようになった。

さらに、今まで片手だけだったのが、両手から射出可能になり、良一の攻撃密度が一気に増した。「これでなんとかなるかな」

良一は片方の手のマジックボールをフェイントに使ってレッサーウルフの動きを誘い、もう片方の手の攻撃を命中させるなどして、徐々にレッサーウルフにダメージを負わせていった。

そんなこんなで、二体の敵を倒すことができたが、リーダー格のレッサーウルフには未だ有効打を当てられずにいた。

しかし、良一の方も敵を二体倒したおかげでレベルが上がったらしく、リーダー格の動きに対応できるようになっていた。だが、それが油断を生んだ。

一瞬の隙を逃さず、レッサーウルフが良一に牙を剥き、口を大きく開いて飛びかかってきた。

マジックボールは間に合わない——そう直感すると、良一は鉄板の入った安全靴でとつさにレッサーウルフを蹴り上げた。

「ギャウウン」

レッサーウルフは鳴き声を上げながら勢いよく吹き飛び、絶命した。

「なんだ……蹴りで一撃かよ。これもレベルが上がってステータスが高くなったおかげなのかな」
先ほどまでチマチマとマジックボールでモンスターを倒してきたのが徒勞に思え、良一はため息をつく。

レッサーウルフを蹴った感触をなるべく思い返さないようにしながら、死体に近づき、かがみ込む。

「ネット小説だと、牙なんかを回収して素材にしてるよな」

他にも毛皮に利用価値がありそうだったが、あいにく良一は皮剥ぎのやり方を知らない。それに、精神衛生的にも牙を折る方が良くと考え、今回は牙だけ手に入れることにした。

舌をだらんと垂らしたレッサーウルフの体はまだ温かく、口に手を突っ込むと、今にも目を覚ましそうで恐怖を覚える。

それでも、手をかけて力を込めると、牙は呆気なくポキリと折れた。

「魔法以外で決着がついたし、なんか拍子抜けだな」



移動を再開し、夕方になった頃、ようやくイース村に辿り着いた。

村の周りは柵と堀で囲まれており、唯一の入口に立っている門番の男が良一に声をかけた。

「旅人さんかい？ 身分を示すものを見せてもらえるかな」

「すみません。身分証は持ってないんですけれど。まづいですかね？」

困り顔で頭を掻く良一に、門番は訝しげな目を向けた。

「持っていない？ 今までどうしていたんだ」

正直に異世界転移の話を出したらかえって怪しまれると思い、良一は適当な理由をでっち上げてこの場を乗り切ろうと試みる。

「えーと……冒険者……そう、冒険者になろうと思って故郷を出てきたんですが、今まで生まれた土地から離れたことがなくて、どうしたものかと途方に暮れていました。身分証というのはどこで手に入るんですか？」

「兄さんは冒険者になりたいのか、そりゃギルドで登録しなきゃな。だがあいにく、この村にはないから無理だ。身分証を手に入れたいなら、木工ギルドの組合所がある。そこで試験に合格すれば組合員証を発行してもらえる。当面はそれぐらいしかないな」

「そうですか……分かりました。考えてみます」

「悪いが決まりでな、身分証のない者が村に入るには銀貨三枚が必要なんだ。持ってるかい？」

「銀貨三枚ですね、分かりました」

良一はアイテムボックスの銀貨をポケットに突っ込んだ手の中に取り出し、男に手渡す。

銀貨を受け取った門番は、夕日にかざして確認しはじめる。

「こりゃあ綺麗な銀貨だな。貨幣の神の神殿にでも行ってきたのか？」

「いえ。旅の商人に両替してもらいました」

「まあ、確かにお金は受け取った。改めて、イーアス村へようこそ」

「ちなみに、宿屋ってありますかね？」

「材木商や行商人が泊まるための宿屋が三軒あるが、金があるなら『森の泉亭』がいいと思うぞ。この道をまっすぐ行ったら先だ」

「ありがとうございます。行ってみます」

門番に一礼して、良一は異世界に来て初の村に足を踏み入れた。

そこそこ大きな村のようで、人口は五百人ほど。周囲の森での木材業が主産業らしい。

建物も木造家屋が中心で、どこことなくヨーロッパの山岳地帯の田舎村といった雰囲気だ。

「ここが、門番さんの言っていた森の泉亭か、そこそこ大きいな」

門番に紹介された宿屋は、木造二階建ての大きな建物だった。扉には『ようこそ森の泉亭へ』と書かれた看板が掛けられていて、中に入ると受付カウンターに男性が立っていた。

「いらつしやいませ。ご宿泊ですか？」

「はい、一人なんですけど、部屋は空いていますか？」

「ええ、二階に一室ございますよ」

「じゃあ、とりあえず三泊で」

「かしこまりました。料金は前払いで、一泊銀貨七枚です。食事は別料金で、一食銀貨一枚ですが、いかがなさいますか？」

「それなら、朝と晩のご飯をつけてください。すると……全部で銀貨二十七枚ですね」

良一がポケットに手を入れると、受付の男はそれを手で軽く制して頭を下げた。

「申し訳ございませんが、本日のお食事はもう受付が終了いたしました……明日の朝からご用意できます。ですので、銀貨二十六枚か、金貨をお持ちなら金貨二枚と銀貨六枚頂戴できますでしょうか？」

「そうなんですか」

アイテムボックスから金貨二枚と銀貨六枚を渡した。

「確かに。では、こちらにご記帳願えますか。お部屋は二階の角部屋、二〇六号室です」

「すみません、文字が書けないので、代筆してもらえますか？ 石川と申します」

「かしこまりました。どうぞごゆっくり」

良一は部屋の鍵を受け取ると、階段を上がって指定された部屋に入った。